

みんなの電力が発掘!

未来を拓く循環型電力

11

「うどん県」として知られる香川県。うどん消費量は全国一だが、その分廃棄されるものも多量に出てくる。こうした廃棄うどんをメタン発酵させ、発電する取り組みが「うどんまる」の循環プロジェクトだ。地元生産者が連携して「うどんまる」の循環プロジェクトを組織して推進しており、年間18万キロワットの発電能力を持つバイオマス発電設備で発電を行い、その過程で出る残渣は肥料化してうどんの原料となる小麦の栽培に利用する。完全循環型に取り組んでいる。できた電気は全量売電している。現在はまた稼働を制限しているため、年間の発電量は能力の3分の1程度だが、回収ルートの整備など徐々に体制を整え、稼働率を上げていく考えだ。

同プロジェクトは、01年10月から産学官民17年10月からの産学官民の共同プロジェクトとしてスタート。プロジェクトを進めるコンソーシアムには、うどんの製造所、さぬき製菓、グリーンコンシューマー高松、Peace of New Bath、香川県、高松市、香川県木材協会といった地元企業やNPO、行政などが参加している。バイオマス発電の核となるのは、一般産業機械および建設機械の製造を行うような製作所の技術ノウハウだ。同社は、04年千葉真佐

資源循環

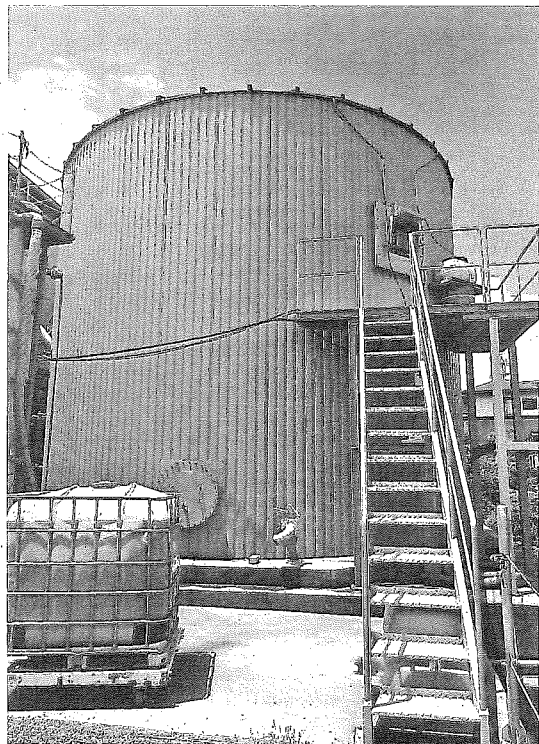
廃棄うどんをメタン発酵させ発電

残渣は肥料化し小麦栽培に活用

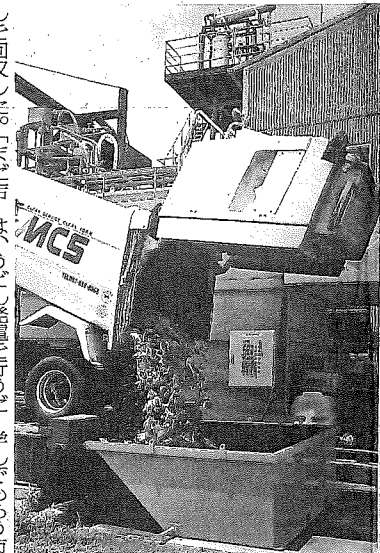
うどんまるの循環プロジェクト

エネルギー固定価格買取制度(FIT)が創設されたことから、熱回収ととも発電の取り組みを始める。その後二企業が少ないことからバイオエタノールの生産は休止し、メタン発酵によるうどん発電事業に一本化し、さらに発電の過程で出る残渣を肥料として

うどんの原料となる小麦の栽培に活用する。このことから、熱回収ととも発電の取り組みを進めている。同社は比較的小型のメタン発酵プラントの開発を得意としており、自社に設置したバイオマス発電プラントは処理能力日量3トン、発電量は1日600キロワット、年間では元うどん店から廃棄うどんを回収した。また店舗からの回収ルートが整備されている。県内学校での出前授業やDVDの配布など環境教育にも注力している。事務局を務める宇賀神幸恵氏は、「小学校から大学までそれぞれレベルに合わせて授業を行っている。小学生には、捨てられていた食品廃棄物から発電でき、食品廃棄物を焼却処理する際の化石燃料も削減できるメタン発酵によるバイオマス発電は非常に意義がある」と(尾寄氏)と、今後プロジェクトの普及・啓発に積極的に取り組んでいく考えだ。



「捨てられていた食品廃棄物から発電でき、食品廃棄物を焼却処理する際の化石燃料も削減できるメタン発酵によるバイオマス発電は非常に意義がある」と(尾寄氏)と、今後プロジェクトの普及・啓発に積極的に取り組んでいく考えだ。



生ゴミ(事業系一廃)も合わせて投入している

コンソーシアムで環境教育にも注力

「うどんまる」は「みんなの電力」の提供で、月1回の連載(お送りしています)。